

山間部における学校統廃合が地域に与える影響に関する研究

学校統廃合
コミュニティ

自治組織活動
愛着・意識

文化産業資源

正会員 同 同

〇西岡 大介 *
横山 俊祐 ***
栗崎 真一郎 ****

同 豊住 由貴 **
同 徳尾野 徹 ****

1. はじめに

市町村の合併や少子化に伴う学校統廃合が全国的に進行している。小学校は地域に活気を与えたり、地域活動の場、地域住民のつながりを提供する場として地域の中心的存在であり、特に過疎地域ではより多くの活動を学校に依存している。また、幼少期を過ごした学校は住民にとっては昔を懐かしむ記憶の媒体のような役割も果たしている。それゆえ地域コミュニティの持続や活性化が問われる中で学校統廃合は地域にとって大きな損失となる。

本研究では、小学校の統廃合の行われた山間部の過疎地域を対象として地域活動、文化資源、住民同士の関わりや学校に対する意識などの変容実体を明らかにし学校統廃合が地域活力に与える影響を実証的に解明する(表1)。

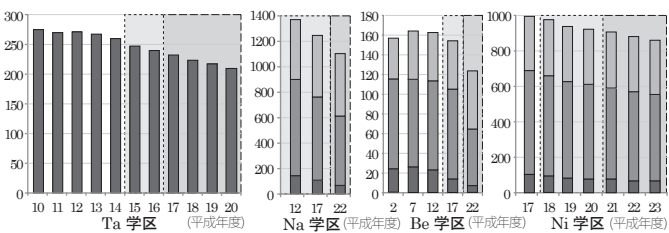
2. 統廃合に伴う地域コミュニティの変容

1) 人口推移 学校統廃合が行われる、もしくは統廃合が決定し説明会等で地域住民に周知された段階から、それまで緩やかに進行していた人口減少が子育て世代など若年世帯を中心に急激に進行する(図1)。将来的な教育機関不足に不安を感じての転出や逆に転入しないことが原因である(表2)。

2) 自治組織活動の変容 学校統廃合によって地域コミュニティを支えていた若年世帯の転出をはじめとして、地域に存在していた自治組織とその活動が縮小、消滅しており(図2)、地域の老人会による昔の遊びの指導、運動場での地域住民を交えた花見、PTAによる地域での活動など学校と連携して行われる地域活動等が廃校と共に消滅している。また、婦人会などの組織も主活動の場が統合校側に集約され、従前校区からは実質撤退した状態になるという事例もある。

表1. 対象地区概要

学区名	Ta学区	Na学区	Be学区	Ni学区	Ya学区
校区内居住人口	195人(H23)	1106人(H22)	123人(H22)	862人(H23)	272人(H22)
高齢化率	21%	44.5%	48%	35.7%	28.2%
統廃合(休校)年	平成17年	平成19年	平成19年	平成21年	平成24年(休校)
統廃合時児童数	13人	30人	3人	26人	2人
地域の概要	大阪府北摂地域に位置しており、昭和30年に茨木市から東能勢村に編入。	河津段丘上に形成された香滝遺跡を有する。同地区内にある吉野歴史資料館で展示を行っている。	京都市街地から車で50分。花背峠を越えた先に位置する。茅葺の屋根も現存している。	和歌山県北西部に位置する山間地域である。集落内は起伏が激しく、林業が主産業だったが、観光産業に移行した。	S.28の紀州大水害により、壊滅的な打撃を受けた。林業が主産業だったが、観光産業に移行した。



(グラフ) 15歳未満 15~64歳 65歳以上 (背景) 決定期間 廃校後
※Ta学区のみ総人口の推移 図1. 年齢3区分人口推移

特に、Be学区の学校存続委員会は小学校の維持を目的に人口流入に取り組むなど学校存続がそのまま地域づくりの活動となっていたが、廃校を機に委員会が消滅し、地域活動も下火になった。逆に、細々と活動を続けていた老人会等の組織が廃校を活用して活動の幅を広げる。廃校を活用する外部団体の支援による地域行事の活性化、廃校がもたらした危機感によって婦人会の積極的な活動が地域の結束力を高め、学校運動会の代替としての民芸大会を開催するなど地域活動が活発になる場合もある(表3)。

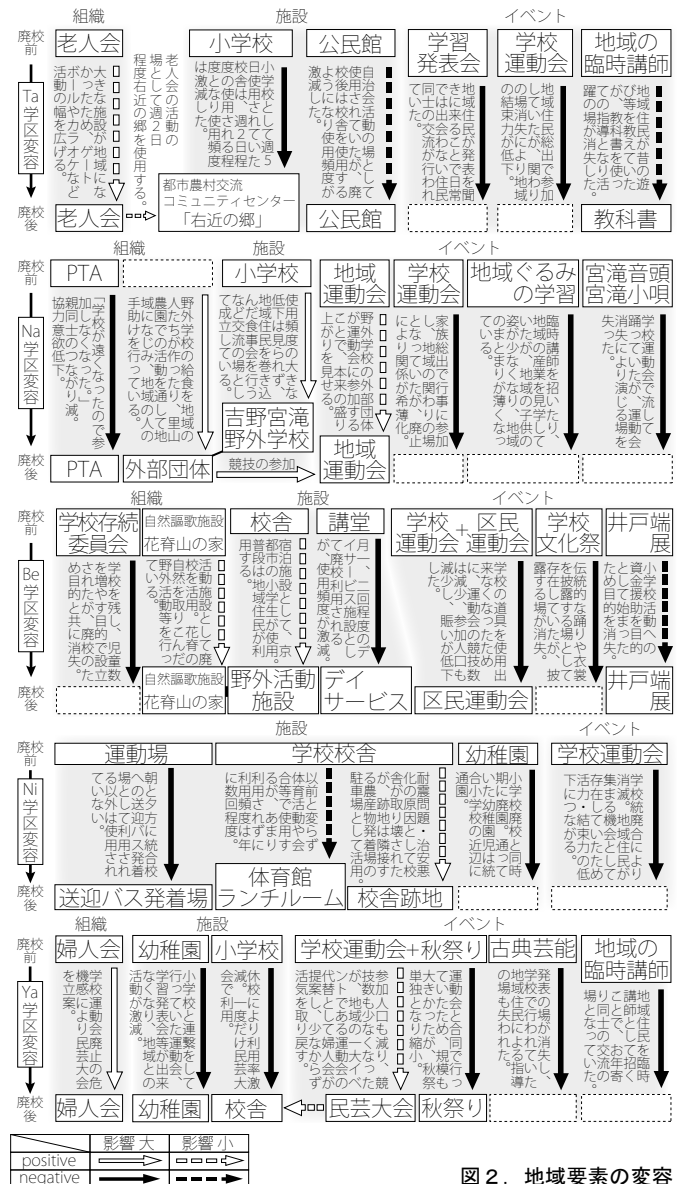


図2. 地域要素の変容

A study on the influence of the consolidation of schools in mountainous regions for community empowerment

NISHIOKA Daisuke, TOYOZUMI Yuki, YOKOYAMA Shunsuke, TOKUONO Tetsu, KURISAKI Shinichiro

3) 文化・産業資源の変容 神輿や神楽、獅子舞、民謡など、地域固有の祭礼や伝統行事・芸能などは、学校活動の中で地域がそれらの指導を行い継承している事例も多い。また、地域の主要イベントである学校行事、特に運動会や文化祭は伝統行事の披露の場としての重要な役割を担っていた。伝統産業の担い手による子供達への指導、学校外での実体験などを行うことで、学校は地場産業の継承にも貢献している

表2. 移住に関するヒアリング

●教育機関の不足
高校の事を考えると毎日のことだからやっぱり市内に住まいが必要だと思う。それで市内に家を設けると、山村の住宅は避暑地のような扱われ方をして帰ってこなくなる。(Be 学区住民)
若い人が来て子どもを大きくしていける環境が無いと出て行ってしまいます。(Be 学区住民)
30何軒あったけど4、5軒出て行って今は25軒くらいです。(Ni 学区自治会長)

表3. 自治活動の拡大・縮小

●外部団体の段階を踏んだ介入
最初はあまり話もしなかったが、施設活用時に色々お手伝いの中で徐々に期待されるようになっていった。特に祭への参加によって認められたような感じがする。住民からしたら活動を共にする者は自分たちが思っている以上に救世主みたい。(Na 学区外部団体部長)
●婦人会の危機感
婦人会員の中でも運動会の代わり何かしようという意見が生まれるように隣地区で行われていた民芸大会の見学を通して実行に移そうと思いた。(Ya 学区婦人会会長)
●PTA 活動に対する意識の変化
今は統合校のPTA 活動として廃品回収とかやってはるんやけど、この地区での活動じゃないし向こうの学校だったら協力するのも別にええやなって感じます。(Na 学区地域住民)
●学校存続委員会の活動
学校を残して児童を増やすことを目的として設立し、地域の貸家・貸土地の提供を呼びかけ幾度帯は移住したが、人口減少に歯止めが効かず廃校、委員会も消滅した。(Be 学区自治会長)

表4. 伝統行事披露・継承の場としての学校

●踊りを披露・継承する場
私たちが子供の頃から運動会や地蔵盆で流して地域の人や子供たちが踊っていた。今はもう披露する機会はない。披露の機会が無いと継承も出来ない。(元 Na 小学校校長)
文化祭でお年寄りの方々に踊りを披露してもらっていたが、地域特有の踊り方や衣裳が何パターンもあって、それを見る機会が減るので継承は難しくなります。(Be 学区自治会長)
古典芸能保存会って言うのがあって保存会が小中学校へ行って古典芸能を教えたり、教えた踊りを発表する時には学校に出向いていました。(Ya 学区役員課長)
●地域の産業を体験する場
学校に地域の有名な方を招いて藁葺きや籠の編み方を指導したり、地域に出て行って傘や味噌醤油などの地域の産業、農業などを体験させていました。(元 Na 小学校校長)

表5. 地域コミュニティの形成要素

●学校運動会によるコミュニティ
運動会には自分の家の子供がいなくても地域全員で見に行き応援して参加しました。見に来た人が参加出来るような競技も入れて地域全員で盛り上げていました。(Ta 学区自治会長)
基本的に学校運動会と地域運動会を同時にやっていた。交互に競技をやっていく。その時に学校はクラスで、地域は居住地でチーム分けをして対抗戦をするけど、子供たちはチームに関係なく自分の住んでる地域を応援して楽しんでました。(Be 学区自治会長)
小学校と幼稚園しかない人数も少ない。秋祭りと合同なので人も確保できて地域の人たちや大学生が来てくれたりして運動会を盛り上げていました。(Ya 学区役員課長)
杖をついてのおおあちゃんが運動会で走るのを子供たちが大きな声で嬉しそうに応援していたので、賑わいは小さくなりました。参加数が減ると競技数も時間も減ります。(Be 学区住民)
●統合後の運動会
統合後の運動会には自治会長しか呼ばれない。一般人は呼ばれないし、呼ばれたとしても遠いから子供がいる家庭しか行かない。(Ta 地区自治会長)
●近隣施設とのコミュニティ
小学校の休み時間に幼稚園の方へ遊びに来て幼稚園と一緒に遊んだり、逆に幼稚園が小学校に遊びに行くと一緒に球技させてもらったりしていました。職員同士にも交流があったので小学校に上がる子供がどんな子だったという情報ももらっていました。園児からしても、小学生に対して憧れを抱いたり、小学校に行くのを楽しみにしていました。(Ya 学区保育士)
●臨時講師によるコミュニティ
人数的に大きな行事ができないから地域住民を臨時講師として招き、昔の遊びや藁葺き作りなどを教えていた。講師として学校に来られることで、滅多に出会わないお年寄りたちが作業しながら同じ時間を楽しく過ごしてくれました。(Ya 学区婦人会会長)
地域の人を呼んで昔の遊びを教えたり、野菜作りの方法とかを教えたりに行ったり、学校と地域が密着して活動していた。(Ta 学区自治会長)
●地域の結束力低下
自由学区制みたいに通える学校が自由になって、隣の子は統合校、うちの子は前の学校に行っていたから、分断されたような感覚でした。だから世間一般で小規模校が反対されている中、学校を残して欲しいという意見も言いたせなかった。(Ni 学区自治会長)
●地域外住民との関係
地域外から来た人の中には、地域の常識みたいなものを理解していないか、ある意味みんなに迷惑をかけてる。子供が学校に通っている間は親同士のコミュニケーションも取れてそういう事は少なかった。卒業してから色々問題が出始めた。(Be 学区住民)
●悩みの共有
地域に同世代の子供を持つお母さんが少ないので、なかなか気が合わない人だと子供の成長の事で悩んでいる方もいらっしゃいます。(Ya 学区保育士)

表6. 統廃合前後の意識の変遷

●シンボルとしての学校の喪失感
学校のそばに住んでるから子供の声、チャイム、音楽の音とかが聞こえなくなって寂しい。子供の声を聞くのはこっちも楽しかったしね。運動会の時なんかは練習の度にやましくて、でもそれが聞こえなくなって静かになるのは寂しい。(Ni 学区住民)
学校が無くなったから多分この地域も寂れるやろうと思う。学校があったら、子どもだけじゃなく郵便局とかも集まってくるけど。そのうちこの郵便局も無くなると思う。(Na 学区住民)
登下校時の子供たちの挨拶が無くなって声がかからないのは寂しい。(Na 学区住民)
地域のお年寄りからは「生徒が1人でも地元へ学校通ってほしい」と、学校が無くなることに反対する意見もありました。(Ya 学区住民)
廃校になって良いと思ったことはない。廃校になってこの学校どうなる？壊されていく？子供が増えたらまた使われる？とか不安なばかりでした。(Na 学区住民)
●校舎に対する愛着
校舎は耐震が出来ておらず取壊しが決定していましたが、統合時には地域のお年寄りから「100数十年続いた学校をすぐ潰したらかわかってるやろうな。ある程度保存せよ。」という感情的な意見も出ていました。(Ni 学区教育委員会)
●学校に対する経年変化
学校跡地がコミュニティセンターになるのは住民の方にとっても嬉しいことですが、その意志も時間も経って薄れていくよね。本当は学校跡地も公共にしておきたいという思いで色々活動してたけどその意識も薄れてくる。もう学校無くてもええやんっていう人も大半いて半分半分ぐらいになってきました。でも、残しておいて欲しいって人もいるし、何らかの形で残そうと色々やっています。(Ta 学区自治会長)

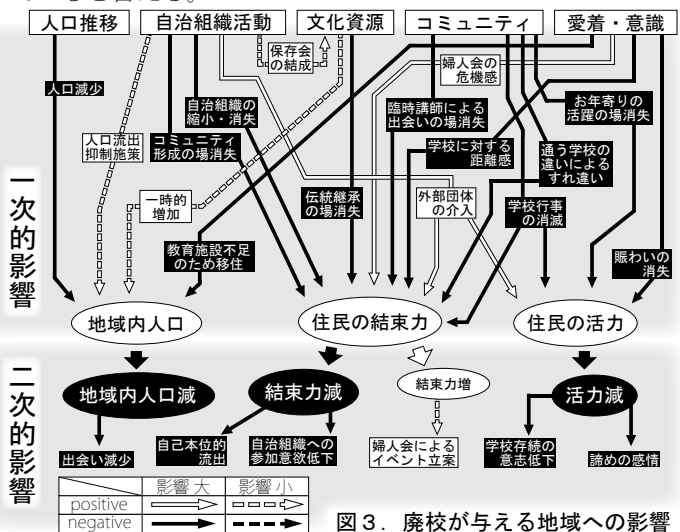
たと言える。しかし、統廃合によりそれら文化資源の指導の場となる活動は無くなり、同時に披露の場であるイベントも縮小、消滅し、伝統産業の継承も困難になったと言える。Be学区には踊りなどの伝統行事が数多く存在し、統合により特有の伝統を継承するのが困難になり、地域の個性が失われている(表4)。

4) 地域住民の出会いの場の変容 学校行事は、学校への馴染みややすさ、親密性のために住民が気軽に参加できる場であり、地域住民のコミュニティ形成の場となっていた。運動会の応援で生まれる地域住民同士の交流や、臨時講師として授業に参加することで普段はなかなか出会わない地域のお年寄り同士が出会い、小学校に隣接する施設が小学校と密接に交流するなど、学校は地域住民の出会いとつながりの場となっていた。統廃合は結果的にそうした人と人のつながりを分断するものになっている(表5)。

5) 学校に対する想い・意識の変容 学校は地域のシンボルであり、廃校により地域住民に寂寥感が広がっている。具体的には、子どもの声や学校のチャイムなどが聞こえない、登下校時に挨拶をしてくれていた子供がいなくなって寂しいという意見や、廃校後の校舎利用についての不安などが聞かれた。また、廃校後3年が経過したNi学区では、学校の取壊しに対して反対意見があるが、統廃合から7年経ったTa学区では、その愛着や学校の存続に対して徐々に意識が薄れるのを実感しており(表6)、学校に対する愛着や親しみが希薄化していく様子が伺える。

3. まとめ

山間過疎地域では学校を拠点とする組織、施設、イベントが多く存在するために廃校は地域の自治会活動や文化・産業資源の衰退に結びつき、コミュニティ形成の場を消失させている(図2)。更に、地域のシンボルとして存在していた学校ゆえに心理的な問題にも引き出している。その結果、人口や地域の活力、住民間の結束力に影響を与え、それによって地域に二次的影響を及ぼしていく(図3)。このように廃校は伝統文化、コミュニティ活動、人と人とのつながりに弱体化するとともに、地域を分断し地域活力の衰退を促していると言える。



* 大阪市立大学大学院工学研究科 前期博士課程
 ** 株式会社社経企画設計
 *** 大阪市立大学大学院工学研究科 教授・博士(工学)
 **** 大阪市立大学大学院工学研究科 准教授・博士(工学)
 ***** 広島工業大学工学部建築工学科 准教授

Graduate Student, Graduate School of Engineering, Osaka City University
 So Kikaku Sekkei Co., Ltd.
 Lecture., Graduate School of Engineering, Osaka City University., Dr. Eng
 Prof., Graduate School of Engineering, Osaka City University., Dr. Eng
 Assoc. prof., Hiroshima Institute of Technology